

五城目町のほこり

# すばらしい先輩たち

1

五城目町教育委員会



## 目 次



木 村 謹 治

—— ゲーテ研究のドイツ文学者



石 井 三 友

—— ぼう大な著書



矢 田 津 世 子

—— 文学ひとすじ



小 野 源 蔵

—— 教育評論家として活躍



築 地 俊 龍

—— 東京六大学リーグの花形投手



き むら きん じ  
木 村 謹 治

---

ゲ ー テ 研 究 の ド イ ツ 文 学 者

昭和60年8月、大川の国道ぞいの場所に、  
大きな顕彰碑けんしょうひがたてられました。

碑には「ゲーテの研究 木村謹治先生せい 生せい  
誕たんの地」ときざまれています。顕彰碑けんしょうひの除幕じよまく  
式しきで、大川小学校の子どもたちが木村謹治が  
作詞した校歌をうたいました。

謹治は大川小学校で学んだ人です。

## 雲がこわい

木村謹治は、明治22年（1889）1月2日、大川村135番地（今の五城目町大川字東<sup>やしき</sup>屋布）に生まれました。父は松助<sup>まつすけ</sup>、母はナヲといい、男7人、女3人の兄弟の3人目の子でした。



木村家は、広い田んぼをたくさんの<sup>こさくにん</sup>小作人に耕させていて、松助は村長をつとめています。白かべの大きな土蔵には、いっぱい本もしまわられていて、兄弟たちは蔵に入るとは、書物を読みふけりました。学問を大切にした木村家の子どもたちは、勉強がよくできました。

長男は家をつぎましたが、そのたの男の子どもたちは、<sup>ていこく</sup>帝国大学を出て学者や実業家になるというコースを歩んでいます。

小さい頃の謹治は、病気はしませんでした。見るからにひ弱そうな色白な子でした。あまいものが好きで、お菓子をせびって母の後ろをついて歩き、いそがしい母にしかられるほどでした。

また、謹治は「雲がこわい」といって外からにげ帰り、母にしがみついて泣いたりすることがありました。

「謹の、雲がこわいが始まった。」

と、両親は笑いましたが、内心では心配していました。

八郎瀉の岸べにある大川は、西の方の男鹿半島の山にわき出した雲が、日本海からの風に送られて、あっという間に天をとぎしてしまう日があります。重く暗く、村も平野も頭上も、ふたのようにとぎしてひろがる雲に、幼い謹治は不安になり、おそろしくなったのかも知れません。

両親にしてみれば、かしこそうではあるけれども、謹治のものに感じやすいところが、気がかりでした。

後、大学にすすんでからの謹治は、ドイツ文学の研究を一生の仕事とします。そして、文豪ゲーテの研究では、第一人者といわれる学者になりますが、雲のこわさを感じとることのできる心が、文学研究を深めたといえるかも知れません。

## 先生にあずけられる

明治32年（1899）3月、謹治は大川小学校の尋常科じんじょうかを卒業しました。

そのころの義務教育は四年の尋常科までで、それ以上は高等科に入らなければなりません。しかし、大川小学校には高等科がなかったので、謹治は大久保小学校の高等科に入りました。

大久保小学校の大和田胤永先生おおわたたねながにあずけられ、謹治は先生の家から学校に通うこととなります。先生の家では、水くみ、板の間のふき掃除、子守りなどの手伝いをさせられ、礼儀作法れいぎさほうをみっちり仕込まれました。

それは、父が信頼する大和田先生に謹治の教育全部をたのんだからでした。きびしいしつけのもとで、いっそう深い勉学をさせ、わが子をきたえあげようと考えたからです。

「つけ物は、重石おもしの重いものほどうまい。人間のしつけも同じだ。」と、父松助はいったということです。

しかし、両親のもとでなに不自由なくくらししてきた謹治にとって、大和田家での生活はとてつらいものでした。決して楽しいものではありませんでした。

土曜日の午後には、笑顔でいそいそと大川の家に帰って来ました。そして、次の日の午後には、しょんぼりしたようすで出かけて行くのでした。

謹治は、母の作ってくれた木綿もめんのマワシトンビを着て、夕日になろうとする光の中を歩いて行きます。ワラジをはき、とぼとぼと田んぼの中の道を遠ざかっていく謹治の姿が見えなくなるまで、母は門のところに身じろぎもしないで立ちつくしていました。母の目には、いつもいっばいの涙がたまっていました。

母ナヲは、昭和12年（1937）12月、74歳でなくなりました。大学の研究室の人が、

「長生きされた方ですし、ご兄弟の皆さんが、そろってりっぱに成人されていますから、安心して目を閉じられたと思います。先生も、平らなお気持ちで、お見送りされたでしょう。」

と、なぐさめをいいますと、みるみる謹治の顔色が変わりました。そして

「5つや6つで、母親に死別した者は、母への印象はそれだけうすい。子どもにとっては、その方が幸せかも知れない。50までも母が健在であつたら、それだけたくさんの印象や思い出がつみ重なっている。いつかは別れなければならないとわかつてはいても、いざとなるとやりきれない。今も苦しいが、これからは折りにふれてどんなに母を思い出すか。悲しみは、もっともっと深くなるだろう。世間なみのことばはいらん。そっとしておいてくれ。」

と、おこったようにこたえました。

母がなくなってから、謹治は次のような歌をよんでいます。

ふる里の家やわびしき喜びて迎え

たまえる母のなれば

やさしい大きな愛情でつつんでくれた母を、謹治はいくつになつても、うやまいしたっていたのでした。

弟雄吉（ゆうきち理学博士、医学博士、東京大学の教授をつとめる）は、兄謹治について、

「雲をこわがった農村の子が、文学を一生の仕事にするようになったのは、母の血をひいているからと思います。母は、物語の好きな人でした。もしまた、兄にさむらい的のところがあったとすれば、それは父に似ていたからといえるかも知れません。しかし、どちらかといえば、兄はおふくろの子だったと思います。」

と、回想記でのべています。

## ネツというあだな

その後、大和田先生が土崎小学校に転勤し、謹治も土崎小学校高等科に転校しました。勉強の好きだった謹治は、どちらの学校でも一番の成績でした。そして、明治35年（1902）県立秋田中学校（今の秋田高等学校）に入学しました。

秋田中学時代の謹治は、友だちから「ネツ」というあだ名をおくられています。

中学校に入ってから、謹治は急に体が大きくなり、ほねぶと骨太のがっちりし

た体格になりました。それまで弱々しく見えたのが想像できない、たくましい青年に成長していきました。

ボート部員となった謹治は、毎日雄物川おものがわでののはげしい練習にあけくれ、とうとう上級生より早く選手になりました。人一倍の部の練習をしながら、勉強も人に負けないほど熱心で、成績はトップクラスでした。そして、級長にも選ばれています。

勉強にもスポーツにも、ひたすらに打ちこみ熱中する謹治のようすに、なかばあきれた友人たちが、尊敬の気持ちをこめて、そのものずばりの「ネツ」というあだ名をおくったのでした。

## ドイツ文学との出会い

5年生になってから、謹治は東京に出て慶應義塾普通部けいおうぎじゅくふつうぶ（中学校、今の高等学校）に編入し、卒業しました。

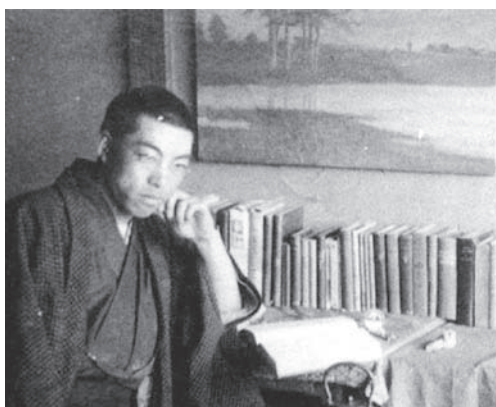
ひたすらにはげんだ勉強のかがあって、明治40年（1907）4月、謹治は仙台市にある第二高等学校に入学します。東京の一高、京都の三高と並び、入学試験がむずかしいといわれる二高に合格したのです。

ふだんの成績がすぐれていたのはもちろんですが、受験勉強も謹治らしく熱の入ったものだったと思われます。

「杜の都」もりとよばれる仙台での謹治は、まじめで健康な学生生活を送っています。

楽しみは、松島でのボートの練習と、宮城野みやぎのの自然を探るハイキングでした。その勉強ぶりもめざましいものがありました。

そのころ二高には、青年の心を引きつけた詩集『天地有情』うじょうの詩人土



二高のころ

井晩翠いばんすいが、英語の授業をしていました。あこがれの土井先生が、謹治のクラスの英語の受け持ちでした。宮城野に出かける謹治のふところには、いつも『天地有情』が入っていました。しかし、謹治はドイツ文学に興味をもつようになり、やがてゲーテの文学にも接したと思われます。

また、仏教にも心がひかれ、<sup>ざぜん</sup>座禪に加わったりしました。  
ゲーテと仏教は、のちに謹治の一生を決定することになりました。

## ゲーテと仏教

明治42年（1909）4月、謹治は東京帝国大学（今の東京大学）に入学し、文学部ドイツ文学科で学ぶことになりました。

「ゲーテ研究を一生の仕事にしよう。そして、りっぱな学者になるのだ。」

そんな気持ちがふくれあがり、謹治はこれまでもまして学問ひとすじになっていきました。

ようやく国際的に認められるようになったそのころのわが国には、まだドイツ文学の研究に必要な本や資料が少なく、なかなか手に入りませんでした。ですから、ひまがあると輸入した原書を売る書店や古本屋をまわって探すしかありません。謹治の楽しみは、本を探して本屋をめぐる歩きことでした。

謹治の求める本は、どれも値段の高いものでした。父の松助は、本を買うお金がほしいという謹治のたのみに、少しも文句をいわず、いわれただけのお金を送りました。それで、なんの不自由もなく、謹治は研究ができたのでした。

東京帝大の近くに、<sup>ちかすみじょうかん</sup>近角常観の開いた「<sup>ぐどうがくしゃ</sup>求道学舎」があります。常観は、<sup>じょうとしんしゅう</sup>浄土真宗のお寺に生まれた人で、明治31年（1898）東京帝大哲<sup>ていだい</sup>学科を卒業しましたが、<sup>しんらん</sup>親鸞の教えを世にひろめようと考え、<sup>うち</sup>求道学舎を建てたのです。新しい仏教をひろめる活動によって「<sup>むらかんぞう</sup>村鑑三、<sup>しんらん</sup>仏教の近角常観」といわれるようになりました。

求道学舎には、常観の教えを聞こうと、若い人びとが集まりました。

仙台にいたときから、仏教に心をひかれていた謹治は、大学に近い求道学舎に通うようになりました。親鸞の教えの深さを知ろうと、常観のことばに耳をかたむけました。このときから、仏教研究もゲーテ研究とならぶ生がいの仕事となったのです。

謹治は、大学で<sup>とくたいせい</sup>特待生を通しました、特待生というのは、特に成績がすぐれているため授業料が<sup>めんじょ</sup>免除されるという、特別なたいぐうをうける



学生のことで、そして、謹治は大正2年(1913)7月、「恩賜<sup>おんし</sup>の銀時計」を授与されて卒業しました。

天皇の賜<sup>たまわ</sup>る銀の時計は、成績が一番の卒業生に与えられます。これ以上の名よなことはありません。

弟雄吉は、

「兄が大学を卒業したとき、私は小学校3年でした。私はおそろおそろ手にとって、恩賜<sup>おんし</sup>の時計なるものを見ました。大型の厚ぼったい、重いものでした。」

と、『兄の思い出』に書いています。こうして、ひとりの若いドイツ文学者が誕生したのでした。

## ドイツ留学

東京帝大をトップで卒業した謹治は、金沢市<sup>かなざわ</sup>にある第四高等学校に、ドイツ語教師として迎えられました。金沢に住んで間もなく、謹治は由利郡<sup>かめだ</sup>亀田町(今の岩城町亀田)<sup>かとうはるよ</sup>の加藤春代と結婚しました。

四高につとめる間も、謹治の研究は休むことなくすすみ、ゲーテのもの<sup>もの</sup>の見方や考え方の中に、自分の求めるものを発見していきました。研究の深まりとともに、若いドイツ文学者として謹治は学者の間で知られるようになります。

そのようなことから、大正9年(1920)9月から12年4月まで、謹治は国の在外<sup>ざいがい</sup>研究員に選ばれ、ドイツに留学することになります。ドイツではベルリン大学に入り、ゲーテの文学を中心にドイツ文学の研究にうちこみました。

ベルリン大学には、有名な東洋学科があります。謹治は、そこで日本語を教えることになります。テキストには『啄木<sup>たくぼく</sup>歌集』を選びました。短歌が好きで、歌をよんだ謹治は、ドイツの学生たちにただ日本語を教えるだけでなく、日本の心を知ってもらいたかったか



ドイツ留学中

らでした。

そのころのドイツは、第一次世界大戦に敗れた後で、物不足とはげしいインフレに人びとのくらしはおびやかされていました。暖房用の石炭はおろか、パンさえ満足に手に入りません。マルク紙幣は紙くずと同じで、トランクいっぱいさつたばの札束でトランクいっぱいだんぼうの小麦粉が買えないありさまでした。

マルクが安くなる一方で、戦勝国の日本の円の価値はぐんぐん上がります。そのため、謹治はたくさんの貴重な本や資料を買うことができました。ドイツのインフレは、謹治の研究に力のかす結果になったのです。

けれども、謹治はぜいたくなくらしをしたのではありません。つつましいくらしを守りながら、大学の友人たちを週に一度夕食にまねき、友情を育てることを忘れませんでした。

## ドイツ文学との出会い研究ひとすじ

ドイツ留学から帰った謹治は、大きな期待で迎えられました。その期待にそむかず、謹治は学者として大きく成長していました。

大正12年（1923）4月に金沢にもどった謹治は、それから一年もたたないうちに、東京帝大ドイツ文学科に助教授として迎えられます。それは、謹治がドイツ文学を研究する人びとの先頭に立つ学者のひとりだ、と認められたからです。そのとき、謹治はわずか35歳でした。

それまで、日本ではゲーテという名前を、ギョエテ、ゴエテ、ゴーチェ



東大での講義

などと、学者によってかってな読み方をし、まちまちでした。そのまちまちだったのが、ドイツから帰った謹治によってゲーテに落ちつきました。それほど日本での、それまでのドイツ文学の研究、中でもゲーテ研究は浅いものだったといえます。

大学でのゲーテの文学の講義には、わが国では使われていなかった新しいテキストが用意されていました。謹治の講義は、それだけ

で学生たちを引きつけましたが、謹治のゲーテへの情熱がじかに伝わってくる新せんさが、学生たちの胸をうつものがあったといいます。

謹治の教えをうけ、高名なドイツ文学者となった高橋健二<sup>たかはしけんじ</sup>は、「ウルファウストについての最初の講義は、まったくおそろしく充実したものであった。私はその一度の講義によって、ゲーテの不思議にとらえられた。」

と、いっています。

謹治は、おしもおされもしない学者になっても、少年のころと同じく「 Netz」とよんでもよい人でした。

## 辞典の編さん

ドイツ文学を学ぶために、まず必要なのは辞典です。辞典は、独和辞典と和独辞典の2種類になります。ところが、わが国にはまだ和独辞典がありませんでした。

東京帝大にうつってから、謹治は『和独大辞典』の編さんにとりかかりました。辞典の編さんは、学問の力はもちろん必要ですが、大変な時間と労力がある上に、正確さが要求される仕事です。ですから、本にするための編集の仕事に入ったのは、9年たった昭和7年（1932）の末でした。

いざ編集ということになると、またつぎつぎに不確かなところが出てきます。どうしても、ドイツ人に教えてもらうしかありません。謹治は、大学のドイツ語教師ヤーン夫妻に協力をたのみ、わが国最初の和独辞典を、正確で信頼されるものにしようと、努力に努力を重ねました。編集は、ようやく昭和12年におわりました。

そして、仕事をはじめてから14年めで、『和独大辞典』は出版されました。これは大へんすぐれた辞書だと評判が高く、今でもこれ以上の和独辞典は出ていないといわれています。

このほかに、弟子の相良守峰<sup>さがらもりお</sup>と二人で編さんした『木村・相良 和独辞典』も有名で、ドイツ語を学ぶ人のほとんどが、今もお世話になる辞典になっています。

## ゲーテを日本人に

謹治は、昭和7年3月、43歳で教授になりました。8年(1933)1月、「若きゲーテ研究」という論文によって文学博士になり、間もなくドイツ文学科の主任教授となりました。

ドイツ留学から帰った後、謹治はドイツでの新しい文学研究について、わが国のドイツ文学の研究者へ知らせることや、研究雑誌の発行などを、先頭に立ってすすめました。その上、辞典の編さんまでしたのです。

日本のドイツ文学研究の中心となる学者として、謹治は尊敬をあつめ、昭和12年6月には、謹治を会長にして「<sup>ドイツ</sup>独逸文学会」がつくられました。

謹治は、自分の研究を本にして毎年1、2冊出版していますが、その大部分はゲーテとその文学に関するものです。研究論文も大変な数になります。このことは、謹治の<sup>いっしんふらん</sup>一心不乱な研究のようすを物語っています。

博士論文「若きゲーテ研究」は、それまでの講義ノートからさらに考えを広げ深めたものでした。ノートから清書をたのまれた研究室の一人は、

「ノートの右半分のページは、木村先生らしいきちょうめんな文字で、仏教に関する書きこみで、いっぱいでした。」

と、いっています。謹治は、

「私はゲーテを日本人にしようという大望をもっている。それは成功しないかもしれない。けれども、聖徳太子や親鸞や<sup>どうげん</sup>道元などが異国の天才を日本人にして、日本の文化を高めた例がある。」

と、友人への手紙に書いています。ノートの書きこみは、謹治の研究の中心となる考えを証<sup>こ</sup>拠づけているように思われます。

これまで、謹治の仏教に寄せる心は強いものがありました。おどろくほどの数の本を持っていましたが、その半分はドイツ文学の本で、もう半分は仏教に関する本でした。ゲーテと仏教が、謹治の研究の車の両輪だったといえます。

「秋田の郷里のすぐ近くの村出身の、あの有名な<sup>ぶよう</sup>舞踊家石井<sup>ばく</sup>漢が、村に帰ったとき創作舞踊をおどって見せたら、村人たちが『おれたちの<sup>さ</sup>ざら<sup>ら</sup>となんぼもちがわな

れたよ。日本人は何をやっても、日本人の本質でやり通すしか道はない  
と知っている。」

と、謹治は話したそうですが、ゲーテ研究をきわめた大学者のことばと  
して、深い意味をもっています。



弟子たちに囲まれて（東大キャンパス）

## ゲーテ記念館

父松助の亡くなった昭和15年（1940）の夏、大学近くの古書店で、  
謹治はひとりの青年と会いました。青年とは、よく古書店で顔をあわせ  
ていましたが、話したことはありませんでした。

「あなたは、このへんでよく見かけるけど、どんな本を探しているの  
ですか。」

気になって、謹治は声をかけました。

「ゲーテの本を探しています。」

「ほう。ゲーテですか。ゲーテの本を探してどうするのですか。」

思いがけないことばに、謹治はきいてみました。すると、おどろくよ  
うなこたえが、青年から返ってきました。

「ゲーテが好きなんです。ゲーテに関するあらゆる本を集めて、図書館  
をつくるのが私の夢です。」

「ゲーテの図書館をつくるというのですか。」

腰かけていた謹治は立ち上がっていました。

「どこかの学校にでもおつとめですか。」

「いいえ、自分で小さな会社をやっています。」

書店の主人が、ふたりの間に立って、

「帝大の木村先生ですよ。」

と、青年におしえました。青年はびっくりして体を固くしました。

「きょうは用事があるので、これで失礼します。来週水曜日の午後2時ころ、大学の研究室に遊びに来ませんか。あなたのご興味のある本もいくらかあるでしょうし、ゲーテ図書館の計画も、私はうかがいたいのです。」

謹治をおどろかせた青年は粉川忠こがわただしでした。この出会いがもとになって、謹治は粉川へゲーテ文学の個人教授をすることになります。

「あなたは、細かなことはよく知っているが、本当のゲーテを知っているとはいえない。私が少し手ほどきしてあげましょう。大学では落ちつきませんから、あなたの会社でやりましょう。」

と、その週の土曜日から粉川の工場へ、謹治は毎土曜日通いはじめました。昭和15年（1940）8月20日から20年（1945）10月まで273回、それは休むことなく、粉川ひとりのためにつづけられたのです。

太平洋戦争がはげしくなり、アメリカ軍の空襲くうしゅうで東京に焼野が原やけのがひろがっていても、つづけられたのです。空襲のあい間をぬって、粉川の工場まで通うのは、まさに命がけでしたが、謹治はいちども休みませんでした。

ただ一円の謝礼ももらわなかったばかりか、ゲーテに関するめったに見られない本を粉川に貸して読ませました。ゲーテ図書館をつくるという粉川の、ゲーテの本に対する目を育てようという思いやりからでした。「私の教えることは、全部あなたへ教えました。きょうでおわります。」と、謹治がいったとき、それまでずっとたずねたいと思っていたことを、粉川はどうとう口にしました。

「先生、どうしてこれほどまでに私のような者に、ご好意をかけてくださったのですか。」

「私がゲーテ図書館をつくりたかったからです。」

謹治は、ただそれだけしかいいませんでした。

粉川は、謹治の夢と自分の夢を、昭和39年（1964）東京の渋谷道玄坂げんざかに「東京ゲート記念館」を完成させてはたしました。地上7階、地下1階の記念館には、世界一といわれる数のゲートに関する本や資料などがおさめられました。この建物はせまくなり、昭和63年北区飛鳥山あすかに2倍の広さのビルを新築して移っています。

一般の人であっても、ゲートを学ぼうという人には、謹治はなんの差別もしないで、自分の研究したことや考えを伝え、理解してもらおうとしたのでした。大学で学ばなかった粉川忠も、謹治の大切な弟子だったのでした。そして、謹治の教えを受けて粉川はりっぱなゲート学者となったのでした。

## その死

昭和20年（1945）8月太平洋戦争がおわると、民主主義がさげばれ大学の空気も変わりました。戦場にかり出された学生たちが、大学に帰って来ました。

ドイツ文学は、戦争中ナチスドイツと関係があったという、誤った見方をする者がいて、謹治はさびしい思いをすることがありました。しかし、一言も弁解べんかいはしませんでした。



顕彰碑

ゲーテと同じ83歳までは生きる、とっていた謹治は、若いときにボートできたえただけあって、がっちりとした大きな体格です。めがねと口ひげの顔は、大学者という感じでした。子どものときからのあまいもの好きはつづいていて、酒も飲まず、たばこもすいませんでした。だれもが、ゲーテより長生きするだろうと思っていたのです。

しかし、病気は謹治の体をむしばんでいました。体の不調に気づいて病床についた謹治は、わずか一週間ほどで亡くなりました。昭和23年(1948) 1月13日、定年少しまえの59歳でした。

さし絵／嶋 崎 和 良

参考資料／小野一二「木村謹治」(『秋田の先覚』三 昭和45年 秋田県)

小野一二「ゲーテ研究の世界的権威木村謹治」

(『秋田人物風土記・続々』昭和48年 秋田県広報協会)

阿刀田高『夜の旅人』(昭和58年 文藝春秋)

平井 法「木村謹治」

(『近代文学研究叢書』62 平成元年 昭和女子大学近代文化研究所)





いし い さん ゆう  
石 井 三 友

ぼう大な著書

## 黒土村に生まれる

国道285号線の大手から能代方面に通じる県道に入って、少し行くと黒土の集落になります。江戸時代は黒土村といましたが、明治22年（1889）に浅見内村、湯ノ又村、小倉村といっしょになり、内川村をつくりました。さらに、内川村は昭和30年（1955）の町村合併で五城目町となりました。

黒土村は、宝永2年（1705）の秋田藩の調べでは、「高」がわずかに81石8斗余りです。享保15年（1730）の藩内の村むらのことを書いた本には、「家の数16軒」と記されるような小さな村でした。

石井長吉は、文化5年（1808）2月15日黒土村に生まれました。石井家は黒土村を開いた古い家で、代々の石井家の主人は「長左衛門」とよばれるならわしになっていましたから、長吉も家をついでからは通称の長左衛門を名のっています。長吉は、たくさんの著書を書き俳人でもありましたが、その著書や俳句には三友の号を使いました。

長い歴史のある石井家ですが、今も残っている過去帳をめぐってみると、家の主人は宝暦6年（1756）11月23日に亡くなった権太郎までわかります。それから長蔵、長太郎、万四郎とつづきますが、万四郎は三友（長吉）の父です。三友の次の代が山友の号を持つ佐吉になります。

父の万四郎は、文化10年（1813）に妻を病気で亡くしました。小さい子どもたちがいるので、間もなく後ぞいを家に迎えました。5歳に



今の黒土

なって三友は母に世を去られるという悲しみを味わい、そして新しい母に育てられることになったのでした。

あとになって、三友は著書の中に、  
「わたしの母の生まれた所は、阿あ仁に南みな沢ざわ村むらの鈴木すずき吉きち之ち助のすけの家である。」  
と、書いています。阿仁南沢村は、今の北秋田郡上小阿仁村南沢で、秋田峠とうげのトンネルをぬけ、萩形はぎなりダムへ向かう道に入ってすぐのところにあ  
る集落です。江戸時代にも峠を越えて南沢の人たちは五城目の市いちへや  
て来ていました。

過去帳をみると、三友が「わたしの母」といっているのは、新しい母のことであることがわかります。三友にとっては、西も東もわからない幼いときから育ててくれた継母けいぼこそ、ほんとうの母だったのです。

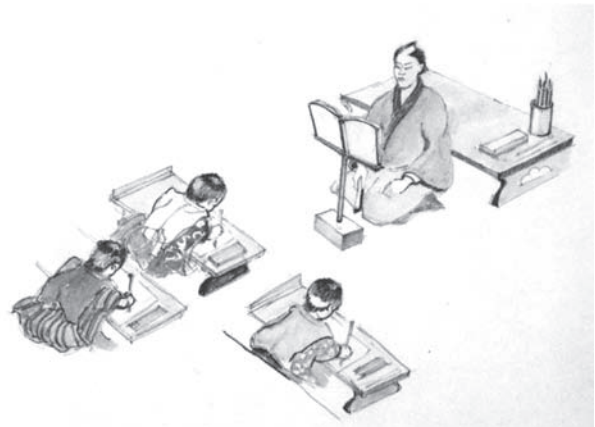
新しい母は、心やさしい人でした。小さい三友たちを、自分の子どもとして深い愛情をそそいで育ててくれたのでした。父は安政3年あんせい（1856）に、母は慶応2年けいおう（1866）に亡くなっています。

## 学問好き

石井家は、代々村長に当たる肝煎きもいりなどをつとめるような家ですから、子どもたちを寺子屋に通わせました。三友も10歳ごろから寺子屋で読み書きを習いました。師匠ししょうは石井久吉いしきゅうきちといい、最初は『都名所往来みやこめいしよおうらい』を習いました。

勉強が好きだった三友は、寺子屋に通っている中に、ひととおりの読み書きだけでは満足できなくなりました。どうにかして学問をしたいものだと思うようになったのです。

けれども、いなかの百姓の子どもでは、そう思うだけでもたいへんなことでした。百姓の子は、村で百姓をするしかありません。学問を学びたいという希望を、無理におし殺してしまうしかありません。寺子屋の師匠は、そうした三



友をあわれんで、持っている本を貸してくれました。

そのころ、五城目のあたりの村では俳句や和歌がさかんでした。一人前の百姓になって父を助けるようになった三友は、ひとりで俳句や和歌を楽しんでいましたが、その中いつもやたて矢立とちようめん帳面を持ち歩き、熱心に句を作るようになりました。そうになると、ひとりで作るだけではがまんできなくなり、近くの村で開かれる句会に出るようになりました。

「百姓は、だまって田を耕していればいい。金持ちのれんちゆう連中といっしょになって、俳句だのなんのってうかれていたら、仕事に身が入らなくなるぞ。」

と、父はこごとをいいましたが、三友の俳句熱はやみそうにありませんでした。

あちこちの会に出ている中に、三友の作品は次第に仲間に注目されるようになりました。人びととのつきあいも広くなり、趣味の上の友人ばかりでなく、学問好きの友人もできます。三友は、そのようなつきあいの中で、師匠について学ぶ以上の、学問をしたのでした。



## 地域の記録

三友は、たくさんの著書を残しています。その大部分は、黒土村や五城目地域についてのいろいろな記録です。

それは、自分の見たり聞いたりしたことを、こまめに書きしるしたものです。本のページを開くと和紙に小さな文字でびっしり書かれています。筆で書かれた文字は、同じ大きさできちんとならんでいます。三友は、ただ記録好きだったばかりでなく、きちょう面な性格の人であるということがわかります。

また、文章だけで不足だというところには、絵や図を付け加えています。三友は、自分だけの記録ではなく、読む人にわかってもらえるように、あとの時代の人にもわかってもらえるようにと考えて、見聞を書

きとめて本にしたのです。

三友の著書は、むかしのことを知る上で貴重な資料として高い評価を受けています。その1部は『新秋田叢書』の1冊として活字化され、昭和52年（1977）11月に出版されました。

叢書の中で特に名高いのは、『醒者塵筐』と『秋田繁昌記』です。

『醒者塵筐』は初編、中編、下編、陽曆録の4編でそれぞれ5冊ずつ計20冊になりますが、残っているのは18冊で、1冊平均90ページです。その1冊に、

「わが20歳<sup>ぶんせい</sup>文政10年（1827）に書きはじめた」と、三友は書いていますが、記録されていることから年月がわかる最も古いものは、天保元年（1830）の記事です。

それから明治10年（1877）70歳まで、この記録はつづけられます。そして、次の『秋田繁昌記』がはじまったと思われます。

『秋田繁昌記』も4編で計15冊ですが、現在残っているのは12冊、1冊平均110ページです。これは、80歳まで書きつづけられました。

三友はきちんとこまかな文字で書くので、どのページも原稿用紙<sup>げんこうようし</sup>2枚ほどの量になっています。このふたつだけでも35冊、約1710ページですから、原稿用紙にすると約6800枚をこえる計算になります。

しかも、20歳から80歳まで、学問への興味をもちつづけ、見聞をたしかめながら書きとめるという努力をおこたらなかったのには、ただおどろくしかありません。



著 書

## 五城目市の記録

『秋田繁昌記』のなかから、五城目市のことを書いてある部分を、今のことばになおしてしょうかいしましょう。

羽後の国南秋田郡五十目村の市は、20里四方のまん中にたつ市場だから、たいへんにぎやかで非常な繁昌ぶりである。

2のつく日は下町に市がたつ。米沢町は魚の市、仲町長町の2町はいろいろな村でとれるものをならべている。7のつく日は上町の番で、御蔵町が魚の市、小池町川原町の2町は四方の村むらから運ばれてきたものがならべられる。魚の種類は海と瀧の両方の魚だから、いちいち書き上げられないくらいである。ハタハタが多く出るときは、魚市は1町にきめられているのに、次の町までのびたり、町まちのはずれや小路小路で売り買いするというありさまである。

藩内には五十目のように市のたつ所が少なくないが、月に6度も日をきめた市が開かれ、しかもその歴史の長いものはどこにもない。これは、土地のわれわれがほこりにしてもよいことである。

人びとが四方から集まりにぎわうようすは、城下の久保田をしのぐくらいである。これは、なんととっても五十目が地の利をしめているからである。

集まった人びとは、生産の道具であるクワ、カマ、ノコギリなどの道具や打刃物、日用品、食料品をもとめる。それらを買うために農産物や林産物を市で売る。市で売られているものは、野菜、山菜などの季節のもの、駄菓子、ムシロなどのワラ工品、木炭、農具、打刃物、衣料品、魚介類など、どんなものでもある。ハタハタは北浦あたりから馬そりで運ばれ、氷がはった瀧の上を渡って来て、正月近い市場を活気づける。その市を「ハタハタ市」とよぶ。

秋のつけもの時には、「大根市」とよばれるほど道の両がわにつみあげられる。岡本だけでも5千本以上の大根が収穫され、市で1日に売られる大根は、1万本を下らないといわれる。

1年中で最も盛大なのは、正月12日の「塩市」である。瀧向いの村むらからは、たくさんの人びとが瀧の氷の上を馬そりで渡ってやって来

る。

これは、江戸時代のおわりから明治時代のはじめにかけての五城目市の記録として、たいへん貴重なものです。そのころの市のさかんなようすが、いきいきと目に見えるように書かれています。

## 手づくり

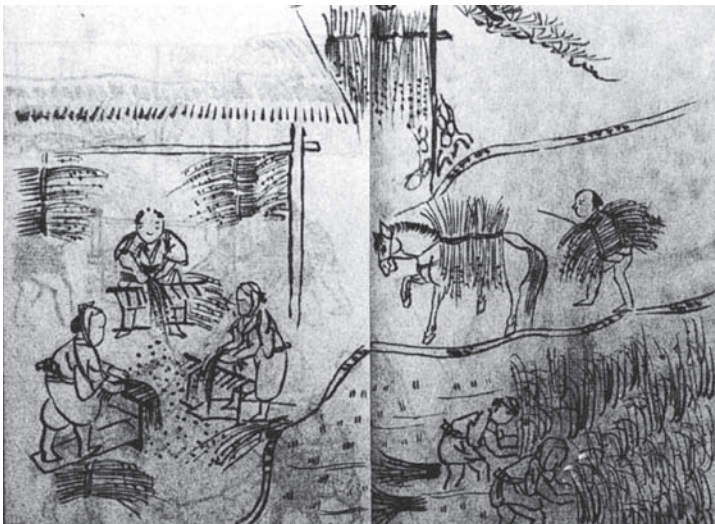
三友は、毎日きまった時こくに机に向かい、1枚1枚ていねいに書いていきました。

1冊分の量になると、はじめのページに序文じよぶんを書きます。次に目次もくじをつけます。それから表紙をつけ、和として製本し1冊の本にしました。表紙には色をぬり、書名と巻数かんすうを書いた題せんという小さい紙をはって仕上げとなります。三友の本を手にとって見ると、実にていねいに心をこめた手づくりの本であることがわかります。

どんなに、自分の学問、自分の勉強、自分の見聞を、三友が大事に考えていたかが伝わって来ます。

三友の著書の文字の形を見ると、ほ先がすり切れてちびてしまった筆で書いているのがわかります。また、自分で使う紙は自分ですいて作り、本の表紙は反故紙ほごを裏返しにして3、4枚重ねてはり、表に色をぬってかくしました。製本だけでなく、なにからなにまで手づくりですませ、けん儉約につとめています。

江戸時代の農村のくらしは、じきゅうじそく自給自足がたてまえでした。三友は、そ



自筆のさし絵「農業の四季」のうち

れを自分の学問や趣味にまで、てってい徹底して実行したのでした。いや、学問や趣味だからこそ儉約を徹底しなくてはなりませんでした。百姓には、そうしたことに使うお金のゆとりはなかったのです。

学問や趣味を同じにする人びととのつきあいは、次第にひろくなりました。近くの村むらばかりでなく、郡内の村むらにもひろがり、藩内の旅をすることもありました。そうしたつきあいのなかで、三友は多くを学び、俳句指導者とみられるようになりました。しかし、三友はそうしたことでは少しも満足しません。知りたいこと、学ばなければならないことは、まだまだ山ほどあります。わからないことがあれば、つきとめないではいられません。

三友は、藩の学校の明德館の先生たちから教えてもらおうと考えました。久保田くぼたにある明德館は、藩の武士のための学校です。村の百姓がいても、門前ばらいをくらののがおちです。そこで、三友は裏門から入って行って、お願いすることにしました。

たのみにたのんで、特別に三友が質問することがらについて、教えてもらうようになりました。三友の熱心さに、明德館の先生たちも負けてしまったのです。

小がらな三友が、まだ朝もやのかかる道をかけるように急いでいます。「そんなに急いで、どこまでですか。」

と、知り合いがたずねると、

「久保田まで行って来ます。明德館の先生から教えてもらうことがあるものだから。」

と、三友はこたえます。三友の明德館通いは、久保田までの往復20里(約80km)の道を日帰りしたといえます。

天保12年(1841)35歳のとき、そのころ「お伊勢いせまいり」といっていた伊勢神宮参拜いせじんぐうさんばいの旅に、三友は出かけています。百姓の身ではお金のかかる旅は出来ませんが、「なんでも見てやろう」の三友は、諸国のひろい見聞のために、伊勢への旅をしたくてなりませんでした。

三友の向学心を知っている明德館の青木先生が、よい方法を考えてくれました。江戸までいく藩の役人のお供になって旅をしたら、というのです。お供になった三友は、給金きゅうきんをもらって江戸までいき、あとの旅の費用をかせいだのです。このときの記録は『醒者塵筐』にあります。



80歳をこえても、三友は机に向かい筆をとることをおこたりませんでした。『山寿帳』は80歳以後の著書です。また、75歳ころから、彫刻や絵にもとりくんでいます。

三友は、人の前では姿勢をくずしたりしませんでした。が、生まじめなだけの人というのではなく、なかなかこっけいなところもあって、人を笑わせたといえます。

最後まで学問する心を忘れなかった三友は、明治23年（1890）11月20日82歳で亡くなりました。三友のぼう大な著書は、町の指定有形文化財として大切にされています。

さし絵／成田哲也

参考資料／小野一二「石井三友と『秋田繁昌記』」

（『あきた』昭和50年9月号）

『第3期新秋田叢書』9（昭和52年・歴史図書社）



や だ つ せ こ  
矢 田 津 世 子

---

文学ひとすじ

矢田津世子が亡くなってから40年になる昭和59年（1984）、字下夕町35番地の津世子の生家があったすぐそばに、文学碑が建てられました。

その碑には、津世子の随筆「思い出の町五城目町」の一節が刻まれています。

『秋田は私のふるさとである。生まれたのは市から10里あまり離れた五城目という小さな町で、いまは一日市から軌道が通じているけれど、その頃は幌馬車とか箱櫛が何よりも贅沢な乗物とされていた。馬車の喇叭が耳に入ると子どもの群はどよめきたって往還めがけて駈けてゆく。近づく馬車を私は毎日のように胸をどきどきさせては迎える。馬車の中に何かいいことが入っていそうな、そのような子どもらしい期待からであった。』

## 五城目での8年

津世子は、明治40年（1907）6月19日に生まれました。本名はツセといい、津世子はペンネームです。

父の鉄三郎は秋田市の人ですが、五城目町長宮田源蔵にたのまれ、明治31年（1898）から町の助役をつとめていました。そのため、本籍も五城目町にうつしています。鉄三郎が助役になり一家をあげてうつて来たのは、五十目村から五城目町になって2年後のことでした。津世子が生まれたころは、町長は渡辺徳太郎にかわっていました。

母のチエは、近所の娘たちを家へ通わせ、礼儀作法や裁縫を教えました。津世子にとっては、なんでもきいてくれるやさしい母でした。父は学校の成績にはひとつも口を出さず、通信簿を子どもたちがもっていくと、だまって受けとり神だなに上げてしまうような人でした。だから、子どもたちはなんでも母に話しました。

母は子どもたちへ、

「上の学校へ進みたいなら、どんな学校にもいかせてあげるよ。」

と、いつもいいました。津世子には、

「女でも勉強はしっかりしなければなりません。そして、人にめいわくをかけてはいけません。」

と、さとしました。

大正3年（1914）、津世子は五城目小学校に入学しました。鉄道は明治35年（1902）に開通していましたが、町の事情で駅は一日市（八郎瀉町）に設けられてしまい、駅と町の間を4kmほどを乗合馬車が連

らくしていました。乗合馬車は、テトテとラッパをならして走っていました。

ラッパの音は、町はずれから聞こえてきます。やがて、馬車は車の音をひびかせて新畑町の小学校の前を通り、古川町（今の紀久栄町）の津世子の家の前から下夕町へ入ります。終点は今町でした。

津世子の随筆は、小学校1年生のころのそんな思い出を書いたものです。忘れられないふるさとのようすと、そこではぐくまれた子どもの心のみずみずしさを、思いきりなつかしんでいます。

その後、乗合馬車は小さな機関車に引かれる軌道にかわりませんが、津世子はその汽笛きてきの音を知りません。2年生になって間もなく、父が17年間つとめた町の助役をやめて、一家は秋田市にうつり、さらに次の年の大正5年（1916）東京にうつり住んだからです。軌道が鉄道の駅と町を結んだのは、大正10年（1921）のことでした。

津世子が五城目町に住んだのは、生まれてから小学校2年生までの、わずか8年間でした。いろいろ記おくに残っているのは、物心ものごころがついてからの4、5年のことと思われます。それでも、自分が生まれたふるさと五城目町は、津世子にとってとても大切な土地だったのです。



## 負けずぎらい

津世子の成績は、五城目小学校では「全甲ぜんこう」でしたが、転校した東京の富士見ふじみ小学校では、ひどい成績になってしまいました。津世子が何かというと、教室中の子どもたちがげらげら笑います。秋田なまりがひどかったからです。東京の子どもたちは、そういう他人の弱点はようしゃしません。

それに、東京の子どもは、津世子からみると、とても勉強が出来て、

その上物知りでした。都会の子どもたちの態度に、津世子の負けん気が目をさました。

「正しいこと、りっぱなことをいうのなら、秋田弁だってなんだって、はずかしいことはないよ。」

と、いつてくれた、母のはげましもありました。

「ようし、それならりっぱな成績をとって見せよう。いなかからやって来た子どもでも、勉強では少しも負けない、というところを見せてやろう。」

と、津世子は決心しました。

もともと力のある津世子のことですから、成績はめざましく上がり、4年生になるとトップクラスになっていました。津世子のまわりに、いつの間にか友だちが集まるようになり、いじめっ子はひとりもいなくなっていました。

そして、<sup>こうとう</sup>高等女学校（今の女子高等学校）でも、<sup>ゆうとうしょう</sup>優等賞をうけて卒業しました。そのころ津世子は、色が白くすらりとした美しい娘に成長していました。

## 文学との出あい

津世子が女学校を卒業した前の年の大正12年（1923）に、兄の不二郎<sup>ふじろう</sup>は第一高等学校から東京帝国大学<sup>ていこく</sup>（今の東京大学）に入学しています。

不二郎は妹の津世子を大変かわいがり、女学校に入ったときから、「これを読んでみるといい。あとで感想をきかしてくれないか。」

などといって、いろいろな小説の本を与えて、読ませていました。はじめは夏目漱石<sup>なつめそうせき</sup>などの日本の小説でしたが、女学校を出てからは、

「チェホフの作品を全部、そしてなんども読むといい。チェホフを読む



のが、一番の勉強になる。」

と、いって、チェホフの小説をすすめました。

不二郎が「勉強」といったのは、小説を書くための勉強のことをさしています。津世子の文章を書く才能に、はじめに気がついたのは、作文を読んだ女学校の国語の先生たにきさぶろう谷紀三郎でした。しかし、もともとは不二郎が津世子を作家にしたいと考えていたのです。計画的に小説を読ませたのも、そのためでした。

そのような読書が、国語の谷先生に、「すばらしい作文です。津世子さんは、将来作家になるかも知れない。」と、いわれるようになったのだとも考えられます。

小さなころ、矢田家に五城目小学校の柳谷先生やなぎやがよく遊びに来ました。あだ名を「赤ひげ先生」といいましたが、来るたびに童話を話してくれるのです。いつの間にか、物語り好きの子どもになってしまった津世子は、赤ひげ先生の来るのを、たのしみに待っていたといいます。作家になってから、赤ひげ先生の「ロビンソン・クルーソー」がとてもおもしろかった、とっています。

津世子には、そのような文学との出あいがあり、体験があったのです。

やがて、不二郎は、「どうだい、ただ読んでいるだけでは、つまらないだろう。小説を書いてみたいと思わないか。」と、いうようになりました。

本当は、不二郎自身が作家になりたいと思っていたのですが、東京に出て来てから生活が楽でなかった矢田家のために、夢をすてなければなりませんでした。

東京帝大ていだいに入った年の大正12年（1923）、関東大震災かんとうだいしんさいで矢田家が焼け、父の関係する会社は経営が苦しくなりました。そして大正14年（1925）には、父が亡くなってしまいます。不二郎は、一家の生活を支えるために、早く大学を出て就職しなければならなかったのです。

作家になりたい希望をあきらめた不二郎は、才能のある妹に、自分の夢をうけついでもらおうと考えたのでした。それは、大正のおわりごろから昭和の初めにかけて、日本で女性作家が活躍しはじめたときでした。

かけい  
家計を助けなければならないこともあって、津世子は銀行につとめました。そして、夜はタイピスト学校に通います。タイプライターをうてる女の人は、すぐれた社員とみられていたころですから、負けずぎらいの津世子は自分の職業に全力をつくそうとしていたのです。

## 作家をめざす

大学を出た不二郎は、生命保険会社に入社しましたが、昭和2年(1927)名古屋に転勤てんきんになりました。

「私といっしょに名古屋にいこう。そこで、みっちり文学修行をするのだ。私が師匠ししやうになってあげよう。」

「私が作家になれるかしら。小説を書く才能なんてあるのかしら。」

「ツセは作家になれる。これまで、ずっと文学の話をして来ているけれども、ツセはすばらしい素質そしつをもっているよ。」

「兄さんが、そういうのだから、ほんとうにしていいのね。」

「そうだ。ほんとうだよ。どうだ、名古屋へいくか。」

不二郎のことばに、津世子は大きくうなずきました。妹思いでやさしくみちびいてくれる兄を、津世子は尊敬し信頼していました。津世子にとって、不二郎は父のようにも思われました。その兄のすすめに、ずっと前から自分は小説が書きたかったのだ、と思いました。

津世子の作家になるために文学修行は、名古屋ではじまりました。20歳のときのことです。

まず、女性だけの文学団体『女人にょにん芸術げいじゆつ』に加わった津世子は、昭和5年(1930)初めての小説をこの雑誌に発表しました。さらに、この年の暮れには、新潮社の『文学時代』の懸賞小説けんしょうに入選しました。これがきっかけとなって、昭和6年(1931)には『文学時代』に2度も小説を発表しました。



兄の不二郎と

どうにか作家としてのスタートをきったのですが、津世子はあっそう勉強しなければならないと思いました。この年の秋、母と兄に別れ津世子はひとりで東京にもどりました。

東京にいと、次々に注文が来て毎月のように雑誌に津世子の作品がのります。しかし、とりあげられるのは、ごく短いコントとよばれる小説ばかりです。若い美しい女流作家という、文学そのものとは関係のない人気者にされたのも、不満でした。津世子がめざしていたのは、そんなコント作家ではなかったのです。

## きびしい文学修行

不二郎は、やがて本社に勤務することになり、一家はまた東京で暮らすようになりました。兄の指導が間にあわないほど、津世子は成長していました。けれども、ほんとうの小説を書けないなやみを、津世子は心にかかえ苦しんでいました。

津世子は文学仲間を求め、勉強を深めようと考え、同人雑誌『桜』に加わります。同人には、坂口安吾、田村泰次郎、井上友一郎らの後にりっぱな作家になる人たちがいて、よい修行の場になりました。さらに、『日曆』の同人となり、作家武田麟太郎の指導をうけるようになります。同人には高見順、大谷藤子、円地文子らがいました。

師匠になった武田は、きびしい指導で有名でした。どんな弟子も徹底的にしごかれるのです。津世子も、原稿を持ちこむたびに、

「だめ、だめ。こんなもの小説じゃない。女学生の作文と変わらないじゃないか。お前には、目がないのか。ものごとを、よくみていない。ものごとの本質を、しっかりと見すえることが、ぜんぜんできていない。」

と、しかられつづけました。原稿は、なんども書きなおすようにいわれました。それま



『日曆』の同人会  
(左から、高見順・大谷藤子・津世子・円地文子)



で美人の女流作家といわれてあまやかされ、文学修行になまぬるいところがあつたのを反省した津世子の、きびしい文学への姿勢が定まったのです。津世子は、死にものぐるいになりました。

弟子の原稿を読んでも、めったに「よし」といわない武田が、津世子を前にして、

「これは、いい。とうとう、いいものを書いたね。」

とって、笑いかけました。その「神楽坂」という作品は、矢田家が上京して名古屋にうつるまで住んだ飯田町のとなり町神楽坂を舞台としたもので、登場する人物には秋田に関係する人物が出て来ます。津世子は、自分の見たものをもとにし、この作品をなんども書きなおし、苦心に苦心を重ねて書きあげたのでした。

「神楽坂」は、『日暦』から『人民文庫』と名前を変えた雑誌に発表されました。昭和11年(1936)、29歳のときです。そして、この作品は第3回芥川賞候補になります。ざんねんながら賞を受けることはできませんでしたが、この小説はたいへん評判になり、津世子は一人前の作家と認められたのでした。

12月には、津世子の最初の小説集『神楽坂』が、改造社から出版され、ベストセラーになりました。そのほか、「妻の話」「桐村家の母」「やどかり」「女心拾遺」など、すぐれた作品を矢つぎ早やに発表しています。

文学ひとすじに、骨身をけずるような努力の積みかさねが、ようやく実をむすんだのです。

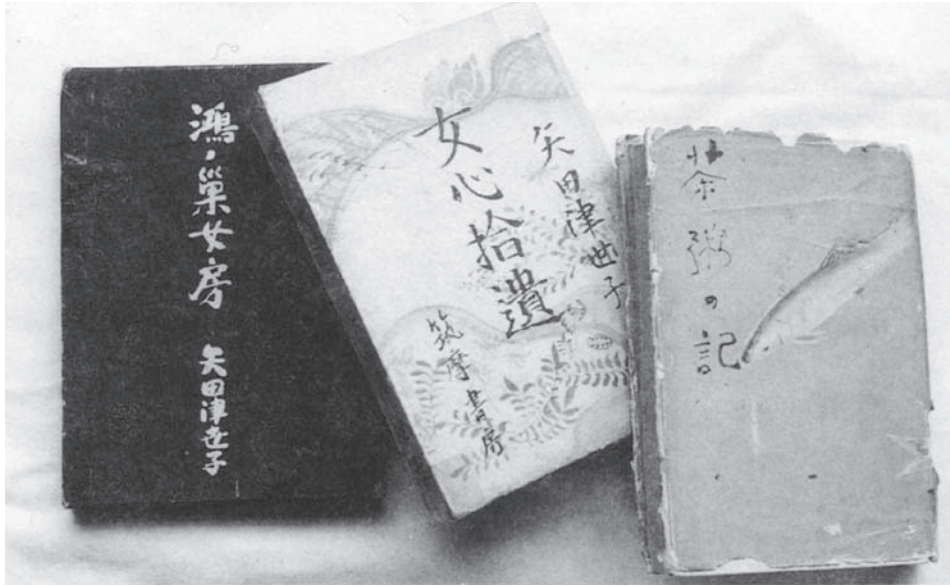


最初の小説集『神楽坂』  
(昭和11年・改造社)

## 早い死

文学碑にその一節がきざまれた「思い出の町五城目町」を『婦人公論』に書いたのは、昭和12年(1937)、30歳のときです。このころが津世子の最も活躍した年だったのです。

津世子は、昭和13年春から病床につくことが多くなりました。いつ



の間にか、肺結核におかされていたのです。それでも小説の筆はずせず、「<sup>こう</sup>「<sup>す</sup>鴻ノ巣女房」<sup>はなかげ</sup>「<sup>ちやがゆ</sup>花蔭」<sup>つるくさ</sup>「<sup>ちやがゆ</sup>茶粥の記」<sup>つるくさ</sup>「<sup>つるくさ</sup>蔓草」などを発表しています。また、「母と子」や「家庭教師」は映画化されました。

なかでも、『<sup>かいぞう</sup>改造』にのった「茶粥の記」は、津世子の最高の傑作といわれ、今でも「神楽坂」と並んで高く評価されています。病気によって人生を見つめることが、さらに深まり、それが津世子の書く作品ににじみでて、読む人の心をうったのです。

「茶粥の記」は、不二郎の話をヒントにして書いたといわれていますが、主人公の郷里を、「秋田といってもずっと八郎瀧寄りの五城目という小さな町」と作品に書いてあります。

小学校2年生までしか住まなかったふるさとを、津世子は忘れられず、ほとんどの小説に、五城目や秋田のことが出て来るのです。秋田弁や秋田の食べものも出て来ます。病気と戦いながら小説を書きつづけた津世子は、幸せだった幼い日をなつかしみ、ふるさとの山や川や人びとを、どんなに思いうかべたことでしょう。

そのころは、今のように結核にきく薬はなく、栄養をとって静かにしているという方法しかありませんでした。しかし、<sup>たいへいよう</sup>太平洋戦争がはげしさをまし、食料はひどく不自由になっていましたから、病気の勢いを止めることはできませんでした。

病床から起きあがれなくなっても、津世子は胸に氷のうを当て、寝ながら原稿を書いていました。そして、力がつきたように昭和19年

(1944) 3月14日、36歳で亡くなりました。

死の少し前、

「ありがとう。もう、なおらないと思うわ。もしなおったら、今度は世の中のために、うんとうんとつくしたい。」

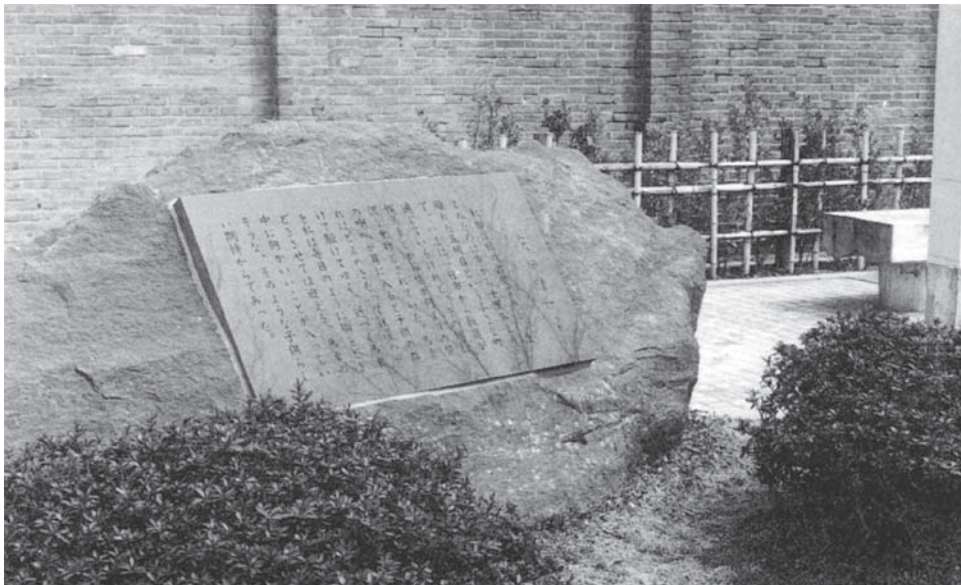
と、母チエと不二郎にいいました。それが最期のことばとなりました。

文学の上で津世子の無<sup>むに</sup>二の友だった大谷藤子は、

「その生涯<sup>しょうがい</sup>を書くために生き、そのために結婚もしなかった。まこと才能豊かな小説家で、誠実と信頼に生きた人である。彼女は、まれに見る美しい人であった。」

と、回想<sup>かいそう</sup>しています。

津世子の文学は、最近また評価が高くなり、平成元年5月に『矢田津世子全集』が出版されました。



生家あと近くの文学碑

さし絵／森田慶子

参考資料／小野一二「美貌と誠実の閨秀作家矢田津世子」

(『秋田人物風紀・続』昭和48年 秋田県広報協会)

近藤富枝『花陰の人・矢田津世子の生涯』(昭和53年 講談社)

『矢田津世子全集』(平成元年 小沢書店)



お の げん ぞう  
小 野 源 蔵

---

ひょうろんか  
教育評論家として活躍

## 号 花城

「花城」というのは、小野源蔵の若いときからの号です。

その美しい号には「花の城を築きずこう」という意味がこめられています。花のさきにおうような、美しい社会を作ろうという理想と決意を、号にしたものだといえます。人びとは、「花城先生」とよぶようになりました。

花城の名で新聞に発表した「馬の背ゆに揺られて」という題ずいひつの随筆があります。

桃はよい花である。わけても遠景がよい。それに絹糸のような春雨が音もなく降ると、まるで花の蜃気楼しんきろうを見るようである。水彩画にふさわしい。(中略)

4年前初めて学校を出て、男鹿の任地に行こうとて、波に雨けぶる八郎湖畔こはんを馬の背にして——。それが人生はつたびの初旅であった。馬子の歌に胸おどるが躍る。左手にいぜきの新関村は折からの桃の花盛りであった。

これは、そのはじめの部分ですが、ペンネームにふさわしい、みずみずしくはなやかな文章です。

明治43年(1910)4月、秋田師範学校しはんを卒業して、男鹿市の増川ますかわ小学校へ教員としての理想をいдаいておもむくときのことを書いてあります。源蔵は20歳でした。

## 生いたち

花城・小野源蔵は、明治22年(1889)8月10日富津内村なかつまた中津又字落合はたけやまとよすけの畠山豊助、モヨの二男として生まれました。畠山家は、田畑のほかに広い山林をもつ、ゆたかで家がらのよい家でしたから、源蔵はなに不自由なく育ちました。

ところが、5歳のころ、源蔵は五城目町の畠山家に養子として出されたのです。源蔵をもらった畠山家は親せきでしたから、両親は安心して養子にやったのでした。



今の落合

そのころは、家の後つぎである長男は特別に大事にされ、それ以外の男の子どもは、よその家へ養子としてくれてやるのは、あたりまえのことでした。どんなにゆとりのある家でも、そういうしきたりになっていました。

小さい子どものうちに養子に出されるのと、一人前に成長してから養子になるのとありますが、なにもわからない赤んぼうのときよりも、少しでも物心ものごころがついた幼いときに、かってに養子にされるのは、子どもにとってはたいへんです。

二男や三男だからというだけで、生みの親からはなされ、知らない家で育てられることは、子どもにとっては、たまったものではありません。

源蔵は、新しい養い親になじむことが出来ずに、いくども落合の生まれた家へにげ帰りました。つれもどしても、またにげ帰る源蔵に、五城目の畠山家ではとうとう養子にするのをあきらめ、生家へもどすことにしました。

たった5歳の子どものが、町を通りぬけて10km余りのいなか道をにげ帰るといふ、つらく悲しい「旅」は、どう見てもふつうではありません。源蔵の一生にかけを落とした、異常な体験だったので



はないでしょうか。そうでしたから、馬に乗って最初の小学校へ教員としておもむく旅が、特に美しく楽しいものを感じたのかも知れません。

## そのころの小学校

源蔵は中津又尋常じんじょう小学校（今の富津内小学校）に入学しました。

町から村まで10km余りの道を、ひとりでにげ帰った源蔵は、強い精神力をもった子どもというだけでなく、とてもかしこい子どもでした。そこで、父豊助は1年早く源蔵を小学校に入学させたのでした。

小学校は落合にあり、尋常科だけでした。尋常科は4年で卒業になり、それで義務教育はおしまいになります。その上に4年の高等科がありますが、義務教育ではないので中津又小学校には設けてありませんでした。

校舎は小さくて、たった1つだけの教室でした。そこで全校50人ばかりの子どもが、1年生から4年生までいっしょに授業をうけるのです。寺子屋をちょっと大きくしたようなのが、そのころのいなかの小学校でした。

教室が2つになったのは、源蔵が卒業したあとの明治34年（1901）でした。義務教育が4年から6年になるのは、明治41年（1908）からで、このとき教室は3つにふえています。

教室ひとつの小さな学校で、源蔵は1歳年上の子どもたちといっしょに勉強しました。そして、4年間1番をつづけました。明治32年（1899）3月に卒業しましたが、卒業生は男だけ5人でした。

## 先生になりたい

卒業が近づいたある日、一関兼吉校長いちのせきかねきちが源蔵にたずねました。

「君は勉強がよくできる。わたしは高等科にすすんでもらいたいと思っているが、将来なにになりたいかね」

「学校の先生になりたいです。」

源蔵のこたえに、校長先生は大きくうなずきました。

「それは、いいことだ。君ならりっぱな先生になれる。」

校長先生は、さっそく父の豊助に源蔵の希望を話しました。豊助は、家をつがない二男だから、教員になるのもいいだろうと考えました。

「おまえは、高等科に進んでもっと勉強して、学校の先生になるのだ。」と、父にいわれ、源蔵の希望はあっさうふくらみました。

高等科があるのは、このあたりでは五城目小学校だけです。長男の正治しょうじが入っていましたから、ふたりは町の遠縁とおえんにあずけられて、学校に通いました。

高等科には、町の子どもだけでなく、源蔵兄弟のようにまわりの村むらの、成績のすぐれた子どもたちが集まっています。源蔵は、ひろい世界に出たいという気持ちを味わい、きびしい競争をうれしいと思いました。

高等科の4年間を1番で過ごした源蔵は、五城目小学校の中に設けられていた南秋田郡立准教員準備場じゅんきょういんに入学しました。1年だけの準備場ですが、これを出ると師範学校の受験資格と、小学校准教員の資格が得られるのです。ここを卒業すれば、小学校に先生としてつとめることができます。

豊助は、準備場だけで十分だと思っていました。兄の正治を大曲農業学校まですすめ、ほかに子どもも多いのを考えると、これ以上は無理だと思っていました。

源蔵は、その後五城目小学校に代用教員だいようとしてつとめるようになります。16歳のときでした。

代用教員は「先生」とふだんはよばれていますが、本当の教員として認められてはいないのです。準備場を卒業しただけでは、准教員の資格しか与えられないからです。その身分は、不安定なものでした。

先生の仕事ほど尊い仕事はない、と源蔵は子どもたちの顔を見るたびに思います。りっぱな先生になろうと、自分の心にちかったことはどうなるだろうと考えます。師範学校に入って、もっと勉強しなければならぬという思いが、一日一日強くなって来るのでした。



## 師範学校入学

がんこな父を説きふせた源蔵は、明治39年（1906）4月秋田師範<sup>しはん</sup>学校本科に入学しました。

花城の号は、師範生のときに使いはじめています。りっぱな一人前の教員を目ざして努力しているうちに、「美しい社会をつくろう」という源蔵が一生かけて追いもとめた理想も、胸のなかに育ちはじめていたということが、わかって来ます。

「美しい社会をつくろう」という源蔵の理想は、教育が持つ大きな目あてでもあります。

源蔵は、身長は特に高いというほどではありませんでしたが、肩幅はひろく胸の厚い青年に成長していました。そして柔道にはげみ、腕前をあげています。きれいな投げ技をみせるというのではないけれども、どっしりとかまえて負けない柔道だったといいます。

明治43年（1910）3月、源蔵は首席で師範学校を卒業しました。そして訓導<sup>くんどう</sup>（小学校教員の資格）として増川小学校につとめました。



## 教育評論家として活躍

明治44年（1911）、源蔵は秋田市の中通小学校に<sup>てんにん</sup>転任しました。中通小学校は、すぐれた先生がそろっているといわれる学校でしたから、若い源蔵にはいっそうはげみになりました。

間もなく源蔵は、秋田市手形の<sup>おのせつよ</sup>小野節世と結婚して、姓が小野にかわりました。節世は生まれてすぐ小野家の養女になった人で、明治44年3月女子師範学校を首席で卒業し、小学校の先生をしていました。

理想を胸に燃やしている源蔵は、その後中通小学校をやめて東京高等

師範学校（後の東京教育大、今の筑波大）<sup>たいそうせんしゅうか</sup>体操専修科に入りました。大正2年（1913）24歳の時のことです。源蔵は、家庭をぬけ出して上京したのです。

努力家の源蔵は、大正5年（1916）春の卒業のときには、体操のほか<sup>ぶんか</sup>に文科からは修身と教育のふたつの免許状まで与えられ、人びとをおどろかせました。

山形県内の中学校（今の高校）につとめた後、大正9年（1920）東京<sup>ていこく</sup>帝国大学（今の東京大学）附属図書館<sup>ししよ</sup>司書となって、ふたたび東京の生活をはじめました。妻や子どもといっしょにくらすようになったのです。

昭和15年（1940）51歳のとき、日本赤十字社につとめをかえ、赤十字社博物館の学芸員にもなっています。図書館司書や博物館学芸員は、そのころではめずらしい仕事でした。学校だけが教育に当たるのではなく、図書館や博物館などもこれからの教育をおしすすめていくのだ、という考えを源蔵はもっていました。そのことを、まず自分で実行したのです。

そればかりでなく、新しい教育をすすめるという立場から、源蔵はたくさん<sup>くさん</sup>の論文で自分の考えを発表しました。それまでのひろい研究から、教育だけでなく文学、芸術、スポーツにも深い知識をもっていましたから、教育評論家としてその名は高くなりました。

特に『新教育論』などの著書で主張したのは、子ども自らが学ぼうとする心を育て、個性をのばすのが、ほんとうの教育であるということでした。それは理論だけでなく、学校や図書館の仕事の実際から説いているものでしたから、人びとをうなずかせる力をもっていました。

また、全国的な読書調査を行って、その結果をもとに読書の指導をするという、新しい方法を考え出したのも源蔵でした。



東大図書館のころ

## 秋田県人のために

源蔵は、東京に住む秋田県出身者のまとめ役として、秋田県人会の幹事<sup>かんじ</sup>を熱心につとめました。そのため、源蔵の家にはいろいろな県人が訪れるようになりました。

なかでも、先輩の源蔵をたよってくる教育の仕事をしている人が多かったので月一回源蔵の家で会合を開くようにしました。だれもがほっとしたように、秋田弁まる出しで、教育の問題を論じあうのです。この会は、「秋田教育倶楽部<sup>くらぶ</sup>」となり、源蔵を指導者として長くつづけられました。

日本児童文学会の会長滑川道夫<sup>なめかわみちお</sup>（湯沢市出身）は、「花城先生は、われわれ後輩の世話をよくされた。先生をたよりに上京して、就職する青年教師たちが後を断たなかった。先生が秋田人を親切に指導された功績は大きいものがある。先生は、秋田人はたえしのんで新しい世界を耕していくのだ、といわれた。先生の信念だった」と、いっています。

東京にいても源蔵は、秋田県人であることをほこりに思っていました。その指導をうけたり、助けられたりした県出身者の数は数えきれないといえます。源蔵に接した人びとは、

「どっしりと落ちついていて、ことばは多くないが、その考えは深く、あたたかな人だった。」

と、だれもがいいいます。



源蔵が亡くなって10数年たった昭和45年に、「小野花城をしのぶ会」が開かれました。たくさんの方が集まりましたが、この会の記録は「教育の先覚者・在京県人の父」と題され、源蔵のすばらしい功績が、最も短いことばであらわされています。

昭和23年（1948）、戦後の秋田県教育を立て直そうという人びとの願いを受けて、源蔵は秋田に帰りました。秋田女子実業学校（後に敬愛学園から国学館高校）の校長となり、専務理事せんむりじになりました。

「新しい日本は、りっぱな母親の手で築かなければならない。だから、女子の教育が大事なのです。」

と、源蔵は説いています。

しかし、帰郷してからの源蔵は病気がちでした。昭和32年（1957）3月20日、67歳で亡くなりました。

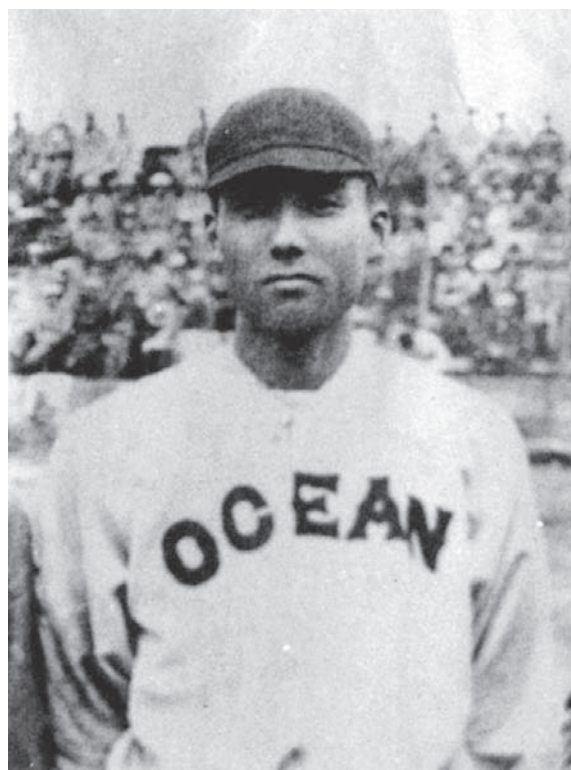


秋田女子実業学校長のころ（前から2列目、まん中が源蔵）

さし絵／成田哲也

参考資料／小野一二「教育人物誌 小野源蔵」

（『教育秋田』昭和55年10月号）



つき じ しゅん りゅう  
築 地 俊 龍

---

東京六大学リーグの花形投手はながた

## 石投げ

築地俊龍は、明治37年（1904）3月7日、父龍明<sup>りゅうめい</sup>、母ヨシの長男として、馬川村（昭和17年五城目町に合併）久保字上川原<sup>がっべい かみかわら</sup>にある自性院<sup>じしょういん</sup>というお寺に生まれました。たん生の3日後に、日露戦争<sup>にちろ</sup>がおきています。

はじめの名前は龍夫<sup>たつお</sup>といましたが、父は長男にお寺をつがせるしかないと考えるようになり、小学校卒業のころに、俊龍と名前を変えています。

俊龍は馬川小学校に入りましたが、成績は誰にも負けませんでした。そればかりでなく、ぐんぐん身長がのび、人なみすぐれた大きな体になりました。いつも元気に外で遊んでいましたから、色はまっ黒でした。

いつの間にか、俊龍は久保の「ガキ大将」にされていばっていました。しかし、いちども弱い者いじめはしませんでした。小さい子どもや弱い子を、よくかばってやりました。

久保は馬場目川を間にして、館越<sup>たてごし</sup>の東側にあります。まわりは田んぼですから、学校から帰ると子どもたちは川原で遊びました。そこでは川原の石をひろって、遠くまで投げる競争が主な遊びですが、

「お前は、番外だ」

と、いつも俊龍は競争の順位に入れてもらえませんでした。それは、4、5年生のときから上級生より遠くへ投げるようになったからです。6年生になると、俊龍の投げた石が、川向かいの館越までとどくので、全力では投げられないくらいでした。



大正7年（1918）県立秋田中学校（今の秋田高校）に入学した俊龍は、たちまち運動部の上級生たちに目をつけられてしまいました。身長が180cm近く、がんじょうな体格でまっ黒に日やけした俊龍は、どこにいても目立っていたからです。

陸上競技部から、入部をさそわれました。庭球部からも、ボート部からも、柔道部からも、部に入るようにいわれました。

野球部からも、入部をするようにと上級生たちが俊龍のところへやって来ました。

「君は、体が大きいだけでなく、腕が太い。手も大きい。君はすごい選手になれる。」

キャプテンだという5年生がいました。

「ボールを投げてみないか。テストのつもりで、ちょっと投げてみる。」

むりやりグラウンドにつれていかれて、川原の石しかにぎったことのない俊龍は、ボールをわたされました。

「かたくて重いだろう。これが、<sup>こうきゅう</sup>硬球というほんとうの野球のボールだ。さあ、思いっきり投げろんだ。」

ボールを手にした俊龍は、そんなにかたいとも重いとも、思いませんでした。俊龍は、2、3度ボールを手の平ではずませてから、

「川原で石投げしてたやつより、軽い。」

と、いいました。そのことばに、とりまいていた上級生たちは大笑いしましたが、俊龍の<sup>えんとうりょく</sup>遠投力には、だれもが舌をまいてしまいました。

「たいへんな男がいるものだ。こいつは、おれたちより投げるぞ。」

「よし。君はきょうから<sup>しゅうちゅう</sup>秋中の野球部員だ。ピッチャーの練習をするんだ。」

キャプテンは勝手に決め、俊龍は野球部に入ることになりました。

## 秋中野球部

秋田県にはじめて野球が入ったのは、明治19年（1886）といわれ。ベースボールとよんでいました。

明治33年（1900）には、秋田県で日本最初の優勝カップをかけた

野球大会が行われていますが、この大会に秋中チームが出場して、社会人チームに敗れていますから、それより前に秋中野球部が発足していることになります。

大正4年(1915)、第1回全国中学校野球大会(今の「夏の甲子園大会」全国高等学校野球選手権大会)に出場した秋中チームは、決勝戦まですみ、京都二中と対戦しましたが、延長13回、2対1で、おしくも敗れています。その後、どうしても全国大会に出場できずにいました。東北大会で敗れたり、全県大会で涙を飲む年がつづいて、くやしい思いをしていたのでした。

その野球部に、すごい1年生が入ったという話は、たちまち全校にひろがりました。しかし、どんなすばらしい選手でも、はじめから優秀な選手なのではありません。きびしくはげしい練習にたえ、練習に練習を重ねて名選手になるのです。

ぬきん出た体格と遠投力の俊龍でも、それだけではまだ野球選手にはなれません。次の日から、有名な秋中の野球練習が待っていました。

そのころの野球練習は、すさまじいものでした。キャッチボールの最初は、グラブを使わず、うなりを立てて飛んで来るボールを、「いたくない」とさけんでキャッチしたといひます。鉛なまりを入れて特別に重くしたグラブで守備練習をして、手足をきたえるということもしていました。グラウンドが暗くなり、ボールが見えなくなるまで、休みなく練習がつづけられました。

ある選手は左手を骨折こっせつしましたが、1日も練習を休めなかったそうです。ある先生は、

「授業は休んでもいいが、野球練習は絶対に休んじゃいかん。」

と、練習でつかれ切った生徒にいったという話も伝えられているくらいです。

## 全国大会へ

俊龍が部員になってから、練習はさらにはげしさを増しました。

大正11年(1922)は、秋田中学校の創立50周年に当たります。その



記念の年には、石にかじりついてでも全国大会に出場するという目標が、いつの間にかできていたのです。目標をはたすには、血の出るようなもう練習しかありません。そうしたもう練習に、俊龍の心と体は少しもたじろがず、負けませんでした。

くしくも50周年の年は、俊龍の中学最後の年でした。

大正11年8月1日から5日まで、仙台市で全国大会への出場権<sup>しゅつじょうけん</sup>をかけて東北中学校野球大会が開かれました。東北地方からの出場校はただ1校です。俊龍は伊藤俊三<sup>いとうしゅんぞう</sup>とバッテリーを組み、ひとりで投げぬぎました。

1回戦	秋田中	16	－	0	仙台商	コールドゲーム
2回戦	秋田中	4	－	0	仙台工	
3回戦	秋田中	8	－	2	盛岡二中 <sup>もりおか</sup>	
準決勝	秋田中	12 <sub>A</sub>	－	3	八戸中 <sup>はちのへ</sup>	
決勝	秋田中	5	－	2	築館中 <sup>つきだて</sup>	

あぶなげない東北大会での戦いぶりに、秋中のエース築地投手は一躍<sup>いちやく</sup>有名になりました。長身から投げおろす剛速球ばかりか、3割4分8厘<sup>りん</sup>の高い打率も大きな話題となりました。俊龍は、この後も大学やノンプロで活躍しますが、投手としてはもちろん打者としても、相手におそれられています。

調子を整えるいとまもなく、13日から兵庫県鳴尾球場で第8回全国大会<sup>ひょうごけんなるお</sup>がはじまり、優勝候補といわれていた広島商業と1回戦で対戦します。

広島商	2	0	1	0	5	1	2	3	0	14
秋田中	1	4	1	0	0	0	3	0	0	9

ようやく記念の年、全国大会出場<sup>しゅつじょう</sup>の目標をはたしましたが、関西地方のきびしい暑さに負けたナインは、1回戦とっぴができませんでした。負けずぎらいの俊龍はくやしい思いをしました。

大正13年(1924)は、甲子園球場<sup>こうしえん</sup>が完成して、全国大会はそこで行われることになりました。秋中チームは、初の甲子園大会に全国大会

3回目の出場をしました。立教大学の選手だった俊龍は、甲子園にかけつけ、母校チームのコーチをつとめています。このときのナインには、2年後輩の五城目出身の選手渡辺時治わたなべときじがいました。

大正10年ころから、五城目小学校では少年野球がさかんになり、チームがつくられています。

## 立教大学と函館オーシャンはこだて

いなかの小さなお寺では、子どもを東京の大学にすすめるというゆとりはありませんでした。しかし、俊龍を大学野球で活躍させてやりたいという人がいて、その人の助けがあって立教大学に進学することになりました。

東京六大学野球リーグで、俊龍は立大の主戦投手しゅせんとして活躍します。そのマウンド上の勇姿ゆうしは、たくさんのファンを熱狂ねつきょうさせました。昭和2年（1927）には六大学リーグでみごとに優勝をかざりました。

昭和3年、大学を卒業した俊龍は、北海道函館の大洋漁業はこだて たいようぎょぎょうに入社し、ノンプロ野球の「函館オーシャン・クラブ」に入団しました。

函館オーシャンは、大洋漁業を中心に明治40年（1907）につくられた球団でしたが、俊龍の入団を待っていたように、その年の第2回都市対抗野球大会にはじめて出場しました。俊龍は、かつての早稲田大学わせだの名捕手だった監督の久慈次郎くじじろうとバッテリーを組んで登場しました。この六大学を代表した黄金のバッテリーはファンを喜ばせ、函館オーシャ



優勝した立教大学チーム（前列右はじが築地投手）

ンの名を高くしました。

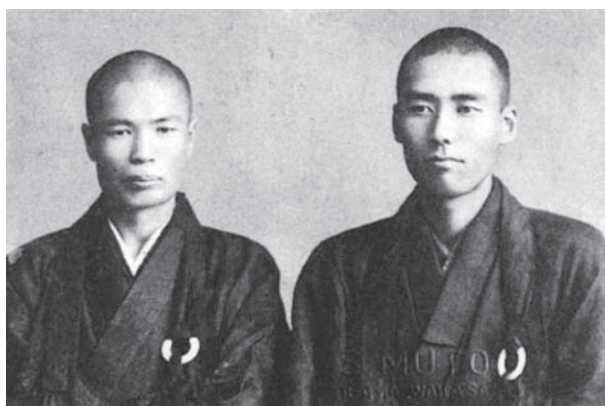
函館の俊龍へ、帆奈に北海道の旭川に天才的な少年投手がいるという話が聞こえてきました。さっそく遠い旭川まで、俊龍はなんども行ってピッチングのコーチをしてやりました。その少年は、のちにプロ野球で大活躍したスタルヒン投手です。俊龍は名投手スタルヒンの生みの親とすることができます。

野球をつづけたかった俊龍は、お寺をつがなければなりません。26歳の昭和5年秋に会社をやめ、曹洞宗大本山永平寺で僧になるための修行しゅぎょうに入りました。はなやかな野球選手の生活をすて、ひとりの雲水うんすいとなってきびしい修行をはじめたのです。そして昭和9年（1934）自性院に帰り住職となりました。

その後は、昭和11年から8年間、曹洞宗宗務庁しゅうむちょうにつとめて東京の生活を送り、昭和37年（1962）から4年間宗議会しゅうぎかいの議員となったり、五城目町の助役や町議会議員をつとめたりしました。

宗門しゅうもんでも、五城目町でも、すぐれた人材として俊龍に期待していたことが、こうしたことからもうかがえます。俊龍は、その期待に全力でこたえようとしました。一生、マウンドの上の精神を持ちつづけていたのです。

なくなったのは昭和47年（1972）11月13日、まだ68歳でした。



永平寺で雲水をしていたころの俊龍(右)

さし絵／北 嶋 隆太郎

参考資料／『秋高百年史』（昭和48年 秋田高校同窓会）

『秋高青春史－伝統は生きている』

（昭和40年 産業経済新聞秋田支局）

執 筆 者／前五城目町立内川小学校長  
小 野 一 二

目次イラスト／成 田 哲 也

五城目町のほこり

すばらしい先輩たち 1

平成2年3月31日発行

編集発行／五城目町教育委員会

〒018-1723

秋田県南秋田郡五城目町上樋口字堂社75

印 刷／湖東印刷所

〒018-1724

秋田県南秋田郡五城目町字下夕町13-5